音楽部　教科提案

自ら音楽にはたらきかけようとする心情を育む

音楽部：齊藤豊　朝蔭恵美子　森尻彩　越川徹郎

１．本校音楽科の目標

本校音楽科で育てたい子どもは、「自ら音楽にはたらきかけようとする心情」をもった子どもである。この“心情”は様々な音楽経験を積み重ねながら育まれた「仲間と表現をつくる力」と，その子の中にわき起こる『自信』とともに生まれる心の在りようと考えた。

またこの自ら音楽にはたらきかけていく心情は，学び続ける原動力となり，自分たちの表現をよりよくしようと追究する姿や，次の活動への期待をもつ姿となって現れると考えている。

ここでいう「自ら音楽にはたらきかける」子どもとは、「わかった」「できた」と満足するだけでなく、その経験をもとに「もっと知りたい」「もっとできるようになりたい」「もっとしてみたい」という願いを持って音楽に関わる子どもである。

２．音楽活動を通して育てたい力と子どもたちの『自信』

私たちは目標を実現するために，子どもたちの「仲間と表現をつくる力」を育てることが必要だと考えている。学級の仲間と表現をつくる中で音楽の楽しさにひたり、音楽や仲間のさらなる魅力に出会いながら，子どもたちは仲間と表現をつくるために必要な経験を積み重ねていく。子どもたちは自身の経験から，音楽表現をするために必要な知識や技能とそれを獲得するための方法，経験から導き出される表現に対する発想，仲間と協働するスキルなどの力を身につけていく。そのために私たち音楽科では，各学年やそれぞれの子どもによって，どのような活動をすることが有効かを，子どもの姿を見取りながら指導計画を更新している。

さらに本校音楽科では，現在学校の研究テーマに掲げている「自分の学びに『自信』をもてる子ども」を，これまでの音楽経験を通して育まれた「仲間と表現をつくる力」が一人一人の『自信』となり，それをもとに次の表現活動に自らはたらきかけていく子どもであると考えた。なぜなら，自ら音楽にはたらきかけていく子どもに共通しているのは，新たな活動や，表現を一緒につくる仲間と向き合ったときに，「〇〇すればできるかもしれない」という“はじめの一歩”をこれまでの経験を足がかりに踏み出すことができる子どもたちであったからである。このような「自分の持つ力を信じること」をバンデューラは「自己効力の信念」といい，その信念が「人間の動機と達成に著しく寄与している」[1]と述べている。私たちは，ここでいう“動機”が本校音楽科の目標に掲げている“自らはたらきかける”契機になると考えた。では「自己効力の信念」を一人一人の子どもたちに育むためには，どのような経験が必要なのだろうか。技能教科の側面をもつ音楽科では，「できた」ことや「わかった」ことが表現活動に対する『自信』に直結することが多い。しかし“その子が感じている『自信』”はその子の内面で感じていることなので，

[1] バンデューラ，A. 編　本明寛，野口京子 監訳 (1997 年) 「激動社会における個人と集団の効力の発揮」『激動社会の中の自己効力』，p.3.

どのように捉えているかを見取ることは容易ではない。また，このような「自己効力の信念」は，教えて身につけさせることもできない。そこで，『自信』が子どもの中にわき起こっていることを，「〇〇すればできるかもしれない」と見通しをもって自分の活動を進めている姿であると考え，その子の道筋で展開を更新していく授業を指導計画の中に位置づけた。

３． 音楽科の目指す子ども像

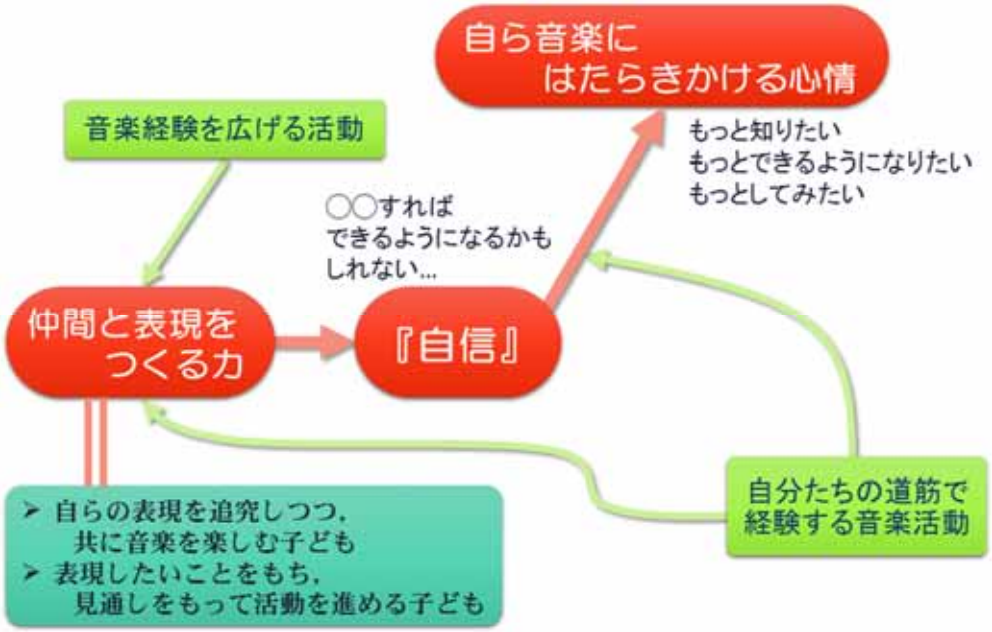
「自らの表現を追究しつつ，共に音楽をたのしむ子ども」
「表現したいことをもち，見通しをもって活動を進める子ども」

経験を重ねてきた音楽活動がその子の中でつながりをもって構成され，「仲間と表現をつくる力」が育まれた姿をこのように描いた。この子の「仲間と表現をつくる力」は，新しい音楽活動に出会ったときに「〇〇すればできるかもしれない」という“はじめの一歩”を踏み出す『自信』となって自分たちの道筋で音楽活動を進めていくと考えた。

そこで，このような子どもたちの活動を支える教師の手だてを次のように整理した。

４．教師の手だて

① 音楽経験を広げる表現活動を設定する
② これまでの経験を生かして，仲間とじっくり表現をつくり上げる音楽活動を展開する
③ 子どもの道筋で活動が展開していくよう，子どもの表現をつくる姿や，仲間と関わり合う姿から授業設計を更新していく



低中学年では①の活動を，比較的短い周期で展開するようにしている。そこでは仲間と一緒に表現活動をする経験を積み重ねていく。また，練習した表現を発表する機会や，様々な行事の中で音楽を通した交流を年間計画の中に位置づけるようにしている。中学年後半からは，それまでの経験を生かした「仲間との作品づくり」の活動を重点活動として位置づけている。とくに年度末に比較的長い時間かけて取り組むまとめの活動では，③の「子どもの道筋」を大切にした授業設計をしていく。もちろんそれは，子どもが描く見通しと教師のねらいを重ねあわせながら授業設計を更新していくことであり，そうすることで活動が子どもたちにとって意味あるものになると考えているからである。 (文責：齊藤 豊)